

東南アジアにおける 生態環境の変貌

古川久雄

はじめに

いいたいことは二点である。自然の恵みと天与の地理的位置を受けて人々が作り出したこの地域の森と海辺と水田の風土に、非ヨーロッパ的文化継承がいまも生きていることが一点、しかし他方、その生態環境とそこにある無数の風土個体を立ち入ってみると、ヨーロッパ文化の作り出した近代物質文明の瀾満の下に現在それらが全体として爆発的变化に遭遇している、しかも多くの場面で日本の経済活動がその触媒であること、これが二点目である。

長い時間をかけて作られてきた自然と調和的に見える風土、これもある時期の急速な開発の時代とその後の風土化の時代、そして次なる開発の時代での急速な変貌といったサイクルを経てきたのであって、現在生じている急速な開発もそうした歴史の一駒だとみる視点も勿論ありうる。人間は己の生存のためにどうしても他の生命を殺し、無機的存在を破壊せざるをえないので、生態環境は人間活動を受けて絶えず変化し、また人間社会も共に変化していくことは否定しようもない。しかし、現在生じているこの地域の変貌は過去のそうした変化、いわば定常的变化、準静的平衡に比べて、爆発的である。ガンジーの言葉に、「自然は人間の必要を満たすことは出来るが、強欲に耐えることはできない」という一節があるが、現在の変貌は制御の利かなくなった強欲が暴走し、結果しているという印象を否めない。それは南スラウェシ州の林地の開発に関して田中耕司さんが報告しているような地方政府と住民が小さな利益を分け合って林地の消失を進めている類の変化と異なる。このスケールの開発はそれなりに定常的である。水田と屋敷林の創出過程で生まれた風土的規範を打ち壊すものではない。この種の小さな変化が集まって現在の変貌が結果しているという見方もあろうけれど、それでは現在の変貌の本質を把握できない。個人間の約束や他の生命体との通底感の上に立つ風土的規範をかえようとする大きな変形力が働いている。個人レベルでは殺人は悪だが、国家間の戦争では殺人は英雄行為という論理の逆転、それに似た逆転が起ろうとしている。ガンジーの述べた規範を逆転させて、強欲こそ自然の富を拡大し、個人の必要を満たす手だてを保証するという強弁が環境の爆発的な変化を生んでいるのだ。

見逃してならないのは、環境の大変貌をもたらしている起動力が住民のコントロール外に移っているということだ。世銀やA B Dや日本その他の先進国の銀行が強欲の引き金を引いており、事業実施の鋤入れが現地政府のテクノクラートや政治家に握られている。強欲発動の決定は住民の与り知らないはるか遠くのオフィスで行われ、外部の力が国民国家の仮装をまっ

て景観を変貌させていく。そしてわずか計りのおすそわけに与った住民が共犯者に仕立て上げられる。悲しき熱帯どころの話ではない。悲しいかな風土、悲しき住民規範よ。

1. 定常的变化——風土的規範の形成——

いまでも、この地域には、至るところつつましい生活がある。地の塩を掻き集めて塩作りをする東北タイの住民達は、村外れに炭焼き窯をしつらえて炭を焼き、池近くの田でおけら掘りをして夕食をにぎわす。フタバガキ科の落葉の散りしいた水田をかきこそと歩きながら、炭焼きの煙が立ち昇るのを見ていると、いい景色だなと思わずにはいられない。水田に掘られた井戸辺に集まってバケツ一杯の水で水浴びをしている女性達のしぐさはつつましさを絵に描いた感がある。こうしたつつましさは自然の生命力と自分達を守る祖霊への感謝とうらはらの関係にある。その関係を目に見える形にしているのがあちこちにある密生林の一角だ。大木の立つ祖霊の森と違って、この密生林は稚樹がびっしりと立っている。元は墓地や放牧用の草っ原だったものが多い。ある日、そこに仏僧が小屋を掛けて修行の生活を始める。村人は僧の修行を妨げないよう、牛を近くに追い込まなくなる。木の枝採りや採草も控える。やがて飛散したり鳥に運ばれた木の種が芽を出し、稚樹が立ち始める。10年もすると10mを超える低木林が密生する。

上座部仏教だから僧は己の解脱だけを念じて修行をする。しかし、その修行が自然の恵みを引き出す。住民はその自然の恵みがまわりまわって、自分と祖霊の安らぎにも恩恵を与えてくれると信じている。ここにある景観は実際に自然の生命力とそれへの信仰を具現化している。風土的規範が生き、生かされている。

歴史的に見ると、風土が作られていく過程で、生態環境と異質な文明が流入し、その時点では環境の変貌が相当大規模に生じたことは想像に難くない。上に挙げた東北タイの例に見える仏教自体が、木の文化と異なる石の文化と結合して流入し、クメール時代の石造建築物が思想の永続性、高い抽象度、高い彫琢度への期待と重なって受容されているかに見える。その事情は、ジャワのクドゥ盆地にポロブドゥールやプランバン、セウ寺院のような壮麗な石造寺院が建立されたとき、スマトラのパダンラワスに石造寺院群が建立されたときも同じであろう。この時入ってきた文化は熱帯多雨林やモンスーン林に胚胎し難い石造建築物が特徴的である。そして、林が切り開かれ、水田や農地の一大開拓時期を画したことは碑文に記録があり、また、バンド灌漑を目的とした堤や集水池の建造からも推定される。

しかし、このヒンドゥ文化受容の時代の開発は現在の開発のように強欲さを正当化する性格

を持っていなかった。そのことは、東北タイもわずか30年計り前までは豊かな林をもっていたし、インドネシアの外島においては15年計り前まで広大な閉鎖林が広がっていたことに如実に示されている。ヒンドゥ文化がもたらした変化は、二つある。制御された人智の働きかけによって自然が恵みを拡大してくれることの認識。そして、己の今生での幸、不幸は前世の己の行いによるのだと考えることで、幸も不幸も受け入れ、今生に善根を積むことで来生への期待をつなぎ、諦観と希望の平衡を心に達成すること。この二つの変化こそ、いまに続く風土的規範の形成に働いてきたものだ。勿論、その風土的規範の鑄型として森の世界で特徴づけられるこの地域には土着的な生命原理が存在したことを見逃すわけにはいかない。自然と人間の間の物質的・精神的エネルギー流は圧倒的に強い自然の側からの放射が勝り、人間は他の存在と横並びの存在に過ぎないこと、万物が造る生命の網目の一つにすぎないことを人々は体得していた。この生命原理の上にヒンドゥ文化が受容されて心が深く耕され、風土的規範が形成されてきた。

この過程はこの地域の大陸側でも島嶼側でも共通だが、その後の経過においては、島嶼側に多数のイスラーム商人が入り、更に、早い時期にヨーロッパ人植民者が侵入したことに見られるように、二つの地域の生態環境とその産物の違い、地理的位置の違いが色々な面で現れてくる。島嶼側に種々の異人が到来するのはその地域が地球上で有数の熱帯多雨林地帯であること、オーストラリアとの生物的漸移帯をもつことから、他の生態区にない特異な産物をもつことが一つの理由、海のシルクロードを通る東西交流の関門を占める地理的位置がもう一つの理由と見られる。

島嶼側のこの特徴は住民の生業構造に鮮明に現れる。かつて高谷好一氏が喝破した如く、この地域にはコレクターと港の商人のみがいるというのが生態的生業構造であった。コレクターは竜腦、沈香、白檀、ダマール、ロタン、コショウ、ニクツク、丁字、金、サイ角、熊の胆、ゴクラクチョウ、ナマコ、真珠、鼈甲、白蝶貝、サンゴなどを求めて移動する。広大な森、島を囲む海は天然の宝庫であり、住民はその元金の生む利子を拾い集めて生計を立てることが可能である。農地開拓は元金に手をつける不利な行為であり、海の幸を強欲に任せて採り尽くすことは反社会的行為である。通過型文化が風土的規範となり、移動耕作を宣言するポマリ、海の幸の移動採集を宣言するサシが規範順守の目印となる。ポマリやサシを個人の使用权の宣言と見る見方は個人の権利に執着して近代法を作ったヨーロッパ人の偏見だろう。通過型文化では社会全体の福利と安定が重要な目標であり、この社会全体の観念には自然を含めることが大前提になっている。当然、ラジャヤスルタンもポマリやサシの制度を支持して実効力をもたせ

る。

この生業構造は結果的に森を保全した。例えば、ボルネオやスマトラに1960年代まで残っていた森は如実にこの事実を証明している。私はスマトラ東岸の湿地林を歩いたことがあるが、林の中には住民出材の細い道以外にも採集用の踏みつけ道が無数にある。航空写真を見ると、単調なテクスチャーを示す林を縫って無数の線状模様がある。このリニエーションがすべて踏みつけ道とはいいい切れないが、林内の経験はそうかもしれないと思わせるに足る。瘴癘極まる湿地林といえども実に多数の人が入って利用している。林が残っているのは人々が怠惰であるからではなくて、林を利用する観点が全く独特であって、通過型土地利用が風土的規範となっているからだ。未開の森林を直ちにフロンティアと思い、農地を開くべしと考えるのはこの地域の生態生業構造に無知であるからか、自分の育った風土的規範を一方向的に押しつける傲岸さからか、いずれにしても実態に即していない。

この地域でも早くから森林を失った島がある。それはジャワ島である。大きな火山島で、水と土に恵まれて豊かな農地と風通しのよい高燥な居住地を持つので、人口集中が進んだ。ここは島嶼部の食糧供給基地としての役割が生態的に決定される。現在、火山中腹部まで農地が広がり、中腹以上もほとんど完全に人工林景観である。屋敷地、園地は多くの果樹、ヤシ、チークやアルビジア、竹などの建材や他の燃材が植えられ、その下には雑穀、オカボ、イモなどの作物も植えられる。こうした人工景観の中にヒンドゥジャワ期の石造大伽藍が点在している。ヒンドゥ文化は先に述べた如く、この地の生態と異質な文化であるが、それ自体変容を遂げると共に、住民の生命原理を更に深く耕し、風土的規範の形成に貢献した。この風土的規範は大陸側の地域と似ているのだが、現時点を考えると少し違う点もある。それは社会全体に商業志向の性格を強く持つことで、住民側にはコレクターや行商人、支配階層には商人王の伝統が強く残っている。住人が支配者を見る時の感覚にも商人王プラス神王としての尊敬の念が色濃い。こうしたことは生態生業構造のしからしめる点と、ヒンドゥとイスラームの重層によってヒンドゥの神王観念が強められこすれ、弱められはしなかったことによるのだろう。

オランダ時代、ジャワ島全島と、スマトラ、モルッカ諸島、スラウェシの一部で商品作物のプランテーションが進められた。ジャワの砂糖キビ、茶、コーヒー、チーク、スマトラのココヤシ、タバコ、ニッキなど、モルッカ諸島の丁香、ニクズク、スラウェシのココヤシ、コーヒーなどが主なもので、20世紀に入るとスマトラ、カリマンタン、スダにゴム園が急増した。ジャワのサトウキビは既存の水田や畑利用が基本線だったし、その他の木本作物は焼畑地や園地へ侵入する形だったので、ジャワではそれ以前からある全島が農地・園地、人工林地という

枠組みにはまりこむ形だっただろう。

外島におけるプランテーション、特にゴム園の増加は相当大面積の林地を変貌させたと推定されるが、かなりの部分がそれ以前の丘陵焼畑地を占拠する形で生じたと推定され、一次林の消失は一般に想像されるほど大規模とは思えない。

勿論、オランダ植民地時代に住民は近代の経済功利主義に遭遇した。農場の整然とした配置や、オフィス、工場、植民者の近代的建築群や、流通のための鉄道や道路の建造が進み、巨大な汽船が行き交う状況を目にした住民は、近代経済功利主義の一端を理解しただろう。しかし、幸か不幸か、オランダ人植民者達が現地の専制支配体制を温存して、その制度の上に乗る二重支配構造をとったことに依ると思われるのだが、住民の風土的規範は意外なほど変形を受けなかった。アジアでも最大規模の植民地収奪態勢に組み込まれながら、彼等は相変わらず通過型土地利用を規範として生きてきた。少なくとも1970年代の末まではそうやってよかろう。そしてこの特異な乖離の背景にあるのは、やはり熱帯多雨林と海の豊かな恵みだ。それは植民地収奪に耐え、加えて、つましい人間の必要を満たすことが出来たのだ。

2. 爆発的变化——独占思想の実体化

通過型土地利用のお陰で、この地域の森と海は最近までよく保全されてきた。しかし、日本や欧米諸国の戦後復興を受けて始まったこの地域の開発は次第に加速度を加え、1980年代の後半からは爆発的である。最も端的には森林の消失にあらわである。そのきっかけは先進諸国の木材需要急増で、為にいままで手を付けられていなかったごく当たり前の林木に値が出てきた。住民の生態生業構造が元金を食いつぶす方向に動き始めた次第だ。

日本は1960年代から熱帯材輸入を急激に拡大した。WWFレポートのデータによると、1952年に50万 m^3 だった熱帯材輸入が1960年には450万 m^3 に増え、熱帯材輸入がピークを示した1973年頃には2700万 m^3 に達した。1978頃からインドネシアが丸太輸出規制を始めて、この値は1980年頃から1600万 m^3 程度に落ち着いている。この間の経過で、ミンダナオの森林資源は1970年代初頭までに涸渇してしまった。その後カリマンタンの木材輸入が始まった。これは丸太輸出禁止措置により1980年代には減少するが、現地での合板製材用木材伐採は続き、東カリマンタンはいまやわびしい疎林が残るだけである。1980年以降は丸太輸出を認めているサバ、サラワクの丸太が日本の熱帯材輸入の9割を占める。

熱帯林伐採の第二の要因は世銀の指導で行われたインドネシアの移民開拓である。その影響はとりわけ沿岸低湿地に著しい。スマトラ、カリマンタンの沿岸部には広大な低湿地があり、

1950年代にブギス人移民が川筋の開拓適地にココヤシ園や水田を開き始めていたが、川筋から離れた泥炭湿地はコレクターの世界で、60mに達する高木がびっしりと地表を覆う湿地林が一面に広がっていた。移民の受け皿としてこの湿地林が1970年代以降大規模に破壊された。大型土木機械を駆使して木を伐採し、幹線水路、二次水路を幾何学的に配置、水路沿いには移民用住宅を並べ、入植移民に生活資材や数カ月分の飯米、種粃、苗木を支給するという具合で、ジャワ、バリの土地無し農民に自作地を持つバラ色の夢を振りまいた。

ところが湿地林の土地は大変な曲者で、ジャワ的な定着農業を支える肥沃な火山地と全く違う。地表を覆う熱帯泥炭は幻の如き存在で、土地を乾燥させ、耕作を続けるとどんどん消失する。厚さ1mくらいの泥炭だと排水しただけで半分に縮み、10年耕作を続けるとはぼ消失してしまう。泥炭が消えると顔を出すのが青黒い色の、植物遺体がたくさん混入したマングローブ堆積土である。これは硫黄を4～5%も含み、土が乾くとこの硫黄が酸化されて硫酸を放出する。硫黄含黄4～5%という値は大変な値で、新しい掘削現場に行くと、化学薬品庫に入ったような薬品臭がある。毒的酸性を放出する土なのである。大陸側のデルタにもこの種の土はあるが、強烈な乾季に酸化が進み、雨季の雨で硫酸が洗い流されるので、畝立てをして2、3年放置すると硫酸が洗脱され易い。3年もすると畝に作物栽培が可能だ。しかし、熱帯多雨林気候では酸化が抑制され、硫酸の洗脱がなかなか進まない。開拓後20年経過しても作物の実りは一向はかばかしくない。大変な曲者なのである。

結局、逃げ出す移民の続出で、無人化した村もある。半分定着すれば、異常に良い成績で、そこは土が少し違うからだ。農業開拓が目的だったとすると、この湿地林開拓は失敗というべきだろう。労働力の分散が目的だったのなら、計画は成功している。逃げ出した移民達は伐採会社や合板工場、その他の労働力需要を満たすことになっているので。

更に、他の「効果」も現れている。移民入植地の間の湿地林がどんどん減少しているのだ。2ヘクタールの割り当て農地で食べてはいけない人々が虫食い状に残された湿地林を伐採し、売れる材は売り、焼畑を行う。乾季は蒿を焼く煙と焼畑の煙で湿地帯は濃い煙で数カ月間日が出ない。湿地帯の川をスピードボートで走ると下流に向かうにつれて煙は濃くなり、水面と空の境は消え、五里霧中でゆっくりと走る。そのうち、煙の臭いが鼻につき、目が痛くなる。乾季はスマトラやボルネオの飛行場は離着陸不能となり、流れた煙でマレー半島の飛行場も影響を受け、マレーシア政府がインドネシア政府に苦情をいう事態だ。

移民入植地に選ばれたもう一つの受け皿は丘陵部だ。ここは毒性の土はないが、瘠悪土壌地帯だ。焼畑で既に草原化した地帯だったので、入植に伴う景観変化は湿地林ほど劇的ではな

かったが、育つのはゴムの木だけというやせ土で食べてはいけないのは同じことで、移民はこの丘陵地帯に広がりつつあるオイルパーム園の賃仕事に出て、またバリサン山地山麓に残っている熱帯多雨林で焼畑と伐採を行う。湿地林と類似の現象がここでも生じ、やはり煙害が相当強い。

結局、移民開拓は言葉通りの効果を生んでおり、定着農業型の勤勉なジャワ農民をジャワのテクノクラートには未開と見える土地に入植させて、ジャワ型の開発に従事させている。ジャワ農民の勤勉さで、林を片付け、田畑を耕すのはジャワではプラスの効果を生むのだが、湿地林ではマイナスの効果を生む。天然の林を園地と人工林で置き換えようという努力は実を結ばないだろう。その見方を裏書きするのが爆発的な林の消失である。

森林消失のもう一つの要因はすべてを呑み込む勢いで進行しているプランテーション化である。スマトラの丘陵部ではゴムとオイルパームとパルプ用のアルビジア、カリマンタンではゴムとアルビジアが多い。スマトラのバリサン山地では伝統的なスモールホルダーのコーヒー、カカオ園地がどんどん広がっている。湿地林の感潮帯では政府のテコ入れでココヤシプランテーションが拡大している。

プランテーションの爆発的拡大を支えている財政的措置はPIRと呼ばれる方式で、政府が直接に、あるいは知事、県長、郡長など地方の有力者が政府の融資を受けて処理工場と中核的なプランテーション企業を作り、周辺住民の生産物もその中核プランテーション企業が集荷し、地域全体の生産を増加させようという狙いである。従来、華人企業家が小農民への融資で開園を誘導していた方式を真似て、もっと大規模にやろうという考え方である。地域毎に中心を作る考え方はフィリピンのシュガー・セントラルにも近い。

こうしてインドネシアの外島も天然林は保存林に僅かに残るのみという状態に近い将来に生じそうな勢いである。これだけ大規模な植生の削剥は地方的な水熱条件の変化を引き起こすことが予想される。湿地林を例にとると、朝方は霧に包まれていたが、いまは霧が立たない。代わりに全体に煙が覆っている。地表の裸地化が著しいランボン州は南スマトラ州から入ってくると全体に暑さが厳しいように感ずる。

東カリマンタンの炭坑開発は、いまのところ、面積が限定されているが、高品質の炭層がクタイからサンクリランまで伸びているので、将来相当大面積になるかも知れない。現在、KPCというオーストラリアの会社が露天掘りで鉱区をどんどん広げている。植生も表土も剥ぎ、50mくらいの深いオープンカットを掘り下げる。この破壊はすさまじい。採炭場から港まで20km、ベルトコンベアで運ばれた石炭は数万トンクラスの運搬船に直接搬入される。石炭の

輸出先はヨーロッパと日本である。

こうした森林破壊で住み家を追われた動物が多数いる。KPCの炭坑開発では、この地域が丁度ボルネオ有数のオラン・ウータン棲息地で、炭坑住宅街にオラン・ウータンが屢々迷い込む。KPC側は麻酔銃で捕獲して他の地域へ移すことを計画している。人間との紛争で傷ついた多数のオラン・ウータンや、台湾の中国人がペットで飼っていて怪我、病気で手放したオラン・ウータンを収容する施設がバリクパパンにある由だ。スマトラでは林を追われた象の収容所がランポンにあり、サッカーを教え込んで、見世物用に貸し出していると霊長類研究所名誉教授の川村先生に聞いた。

林の中にある野生ドリアン、野生マンゴー、イチヂク、豆の木、マングローブの実、諸々のヤシの実、様々な果実やナッツ、灌木の葉や竹の葉、それらは林に住むオラン・ウータン、象、鹿、熊、猿、猪、ホーンビル、インコ、その他の動物の食糧である。林は人間は勿論これらの動物も養ってきた。逆に、動物が食い残した実、糞と一緒に排泄された種は生育がよく、林の再生に役立ってきた。この自然の連鎖を重視するというより、それから独立しては人間も生きること能わずという認識がこの地域住民の風土的規範の土台だった。人間が必要を満たす装置である水田や畑を開いた後も、刈り残し株を放置したり、精霊への供物の形で他の生命への配慮を決して忘れはしなかった。現在の環境変貌は、自然の全ての恵みを人間だけが独占する形で生じている。独占意識が環境に反映されている。自分で自分の基盤を掘り崩して、人は生を続けられるのだろうか。もし生き延びたとして、独占の果てに寂寞たる砂の海となった環境に幸福があるのだろうか。

海と海辺の環境変貌も急速である。とりわけ海辺の変貌が爆発的である。スダダ海の濁った海は陸と海の界面が広い。タイダルフラットとマングローブの幅が広く、そこに海・陸共働の富栄養帯が作られているので、漁民はその幸に依存した素朴な方法で魚貝を採集可能である。タイダルフラットで三角網を人力で押して歩いたり、船で押し進むとか、潮汐差を利用してマングローブから干潮時に下がってくる魚をエリで捕獲するといった驚くほど素朴な漁法がいまも生きている。しかし、この富栄養帯の自然はいま、猛烈な圧力を受けている。例えば、世界のエビ流通量の2/3を買い占める日本という巨大な市場があり、漁師達はこの富栄養帯にエビ捕りのナイロン製刺し網を十重二十重に張り巡らしている。地付きの漁師は資源保全に極めて敏感であり、こうした方法は聞き込むと判ってくるのだが、短期決戦型の華人漁師や華人仲買が誘導したものである。ともかくおっかなびっくりで誘導に乗った漁師達もびっくりするほど、捕っても捕ってもエビが捕れる。しかし所詮目算なしに自然が何処まで負荷に耐えら

れるか、どんどん負荷をかけている状態だ。漁師も仲買も20年はもつまいと思っている。漁場がヘタッたら漁場を変えねばなるまいという意見も一致している。

しかし、華人仲買達は別の方法も考えている。それは比較的水の透き通ったサンゴ海の海辺でマングローブを開いてエビ養殖を行うことである。ジャワ島北岸や東カリマンタン、南スラウェシなど、珊瑚礁のある海の沿岸部で養殖池は古くからある。水のきれいな深い海と珊瑚礁を埋めたマングローブの組み合わせはエビの産卵地と稚エビの育成場を一揃いでもっていることになり、エビの養殖に適している。フローレス海に面した島々の砂浜海岸では女子供がバナナの葉のフリルのついた長いロープを渦巻き状にひいて歩き、バナナの葉陰に集まってくる稚エビやボラの稚魚をタモですくう。集めた稚魚はマングローブを開いた養殖業者に売る。エビ養殖池が爆発的に増えたいまは、こういう悠長な方法だけでは追いつかないので、大きな養殖業者は専用の孵化場をもち、孵化専門の業者もたくさんいる。その場合はアチェー近傍のインド洋で捉えた見事な親エビから採卵する。コンクリート製の孵化槽の中の稚エビはアメリカやフランス製の餌を与えられて育つ。

こうしてフローレス海、マカッサル海峡のマングローブは完全に姿を消した。農民達もエビブームの分け前を得ようと、海岸部の潮の入り易い水田はエビ池に変え、潮がかりの悪い水田はボラ池に変換を進めている。しかし、こうした環境の単純化は脆弱性を露呈する。南スラウェシ西岸一体ではインサン・メラーというヴィールス病が1990年頃に現れ、いまや爆発的に広がった。池を干したり消毒する能力の無い小経営池はエビ収穫0の状態である。消毒薬と抗生物質をまき散らした池で育つエビ、それを大量に食う日本人に、畸形発生率が高まることを恐れる。

日本人はタラコやサケの卵など魚卵が大好きである。最近ではスシ屋でトビ玉つまりトビウオの卵が出まわっている。日本のトビ玉需要に目をつけた華人仲買達が大量に卵だけを漁獲する方法を進めている。マカッサル海峡に面したスラウェシの漁村では、以前からマカッサル海峡中央部へ両アウトリiggerでの出漁が盛んである。マグロやカツオ、トビウオ、サメ、サバナなど回遊魚を捕獲する。狭いアウトリiggerくり船の洋上生活を1ヶ月ほど続ける漁師達もまだ多数いるが、華人仲買達からエンジン付きのパトラニ船を貸与され、5人1組で乗り込んでトビ玉漁に従事する割合が急激に増加している。4月から9月までの乾季の間、1ヶ月1航海を数回繰り返す。漁場では円筒形の釜にココヤシやバナナの葉の長いフリルをいっぱいつけて洋上に浮かす。葉に産卵に集まって釜に入り込んだトビウオから採卵する仕掛けである。卵も魚も塩漬けにして持ち帰り、仲買と漁師の間で収入を折半する。こうした漁師村は他村に比べて

格段に家が立派であり、華人と漁師は共存共栄である。それは結構なことだが、日本の胃袋は巨大で、華人は徹底的に利を追求するので、トビ玉漁はトビウオ資源の前途に危険な兆候だと思わざるをえない。

卵ではないが香港、シンガポールの華人のグルメブームでハタの白蒸しが大人気である。このハタはフローレス海域の島々から生簀船で集荷され、華人が生きた魚を消費地まで搬送する。ハタは珊瑚礁外壁の底深く、孔の中に生棲するという。やはり華人仲買から貸与された船で出漁した漁師達は素もぐりで、孔の中に居るハタを手づかみにする。麻酔薬を孔中に撒くようだ。海面へ出るとハタの浮き袋が膨張するので、そのままでは窒息して死んでしまう。そこで胸ビレから後ろへ3枚鱗を数え、4枚目との間から千枚通しを斜めに刺しこんで浮き袋を破る。この処置をすると生け簀の中で生き延びられる。この技術はやはり華人仲買が漁師に教え込んだものだ。生け簀は島陰の洋上に網で作り、魚が増えると運搬船が香港やシンガポールからやってきて、5トン、10トンとまとまった生魚を運ぶ。輸送中の死亡率は25%位と相当高い。死んだ魚は捨てる。

いまのところは素潜りだが、いずれアクアラングを付けて、捕魚能率を高めることになるだろう。輸送ロスを減らす為に低温仮死輸送という技術も検討されているそうである。しかし、そういう技術の研究は核兵器や毒ガス兵器の開発と同じだという気がする。技術はすべて両刃の剣であるので、よく切れるようにすることは、それを利用する社会的規範の方も強める手だてが必要だろう。強欲を野放しにして両刃の剣を磨き、人間が自然の独占を図ることはこの地域の規範を崩し、自然を次第に涸渇させ、己の物質的基盤も崩すことになる。日本人も南方の華人も食べすぎである。先進社会は紙を使いすぎ、石油石炭を使い過ぎである。

違う見方もあるだろう。自然のキャパシティは大きいので少々食べすぎたとしても涸渇はしない。熱帯林を真似た複層構造のプランテーションにし、ニッチェを増やせばよからう。熱帯の光と熱を充分に利用するプランテーションは地域の特質を生かした勝れた産業である。収入を上げ貧困を克服し、車や電気製品が入ることは進歩ではないか、北の住民のみが豊かさを味わっていて、南の人間に貧しさを押しつけるのは傲慢である、と。不公正なアンバランスは正さねばならない。しかし、君たちの哀れな生活は捨てて、我々のモデルに近づきなさいというのはもっと傲慢である。自然を見下し、南の世界の風土的規範を無視している。

それぞれの小さな社会を律する人工的規則はあっても、風土的規範を忘れてしまった北の住民には理解できないかも知れないが、規範の有効性は人間の力の及ばない存在があるという認識と対になって始めて発揮しうる。数10mの高木、まして数千年を経た森林、これは人間の力

の及ばない存在、人間の住めない瘡癩の地、そうした生態環境が物理的にそこに存在してこそ風土的規範が形成され、独自の魅力を持つ様々な風土が生き続ける。未来を切り開く多様な価値観が生きられる。地球環境保全という課題はこうした風土的規範が無ければ実現しえない。現状はそれを忘れてしまった北の人々が指導にあたっているという誠に不幸な逆説がある。そして現在、この地域でも生態環境が拭い去られようとしている、近代的生活の豊かさと引き換えに。世銀や ADB や JICA や、現地政府、華人企業家や日本の企業家達が、豊かになるのを手伝ってあげましょうといいながら、住民の風土的規範を引き剥がそうとしている。住民を善玉に描きすぎる意図はないが、ともかく 1970 年代まで生態環境を保全してきたのは彼等の身についた風土的規範だったことを誰もが忘れてしまっている。そして引き剥がそうとする外の力の強さに比べて、抵抗する力はいかにも弱い。どうすればいいのか、生態学者も、経済学者も、哲学者も、政治学者もじっくり考えて欲しい。

コメント

吉 田 集 而

地域研究と生態環境というのがこの班のテーマですが、地域研究というものにはいくらかの思想的なバックグラウンドがあるわけです。例えば、梅棹忠夫のように地域というのは文明単位であるという考え方もあり、あるいは地域研究というのは新しい学問の創出であるという考え方もあります。生態環境班はそういう点では少しバックグラウンドが違うのではないかと私は考えています。典型的には高谷さんの世界単位論がそれに対応するのではないかと思います。世界単位という独自の世界があり、独自の価値観を持った安定的な地域というものがある。そして、それぞれの地域が共存していくのが望ましい。すなわち、多様な価値観を持った世界単位という世界が共存していく形が望ましいという考え方です。ここでいう、地域という世界単位は、明らかに生態環境の上に成り立っています。そういう点では、世界単位である地域を守る、ひいてはそれは生態環境を守るという筋道の上にたってゆくわけです。古川さんの今回の発表も基本的にはこういう考えの上に立っていると私は見ました。人類史はいつてみれば、人類による環境破壊の歴史ということができると思います。古川さんが安定的風土という風に発言されましたが、本当にそうなのでしょうか。それは時間のスパンの問題であろうと思います。

非常に短い時間で見ると、たしかに少し前までの地域像、世界像というのはかなり安定的に見えます。もっと長い人類史というスパンで見ると、明らかに人類というものは自然を破壊し続けて成り立ってきた。いってみれば自然破壊は人類史の正当なる道筋であったと考えることもできます。しかし、最近の変化は極めて急激なものです。一つは非常に短い時間での変化は到底調和的にはならない。そのために様々な問題が析出していると考えられます。その変化の一つの理由は人口の急増です。そして世界経済に組み込まれたということが、こうした大きな変化に向かっている一つの理由だろうと思います。このままこの活動が続けば、果たして安定的、平衡的な状況が出てくるかどうか。これは私の勝手な意見ですが、究極の自然破壊というものに向かっているのが私達の人類史のほぼ宿命的なものではないかと思えます。

しかしながら、先ほどの世界単位、地域像というものからものを見るとかなり変わった形がまた出てきます。

いま自然破壊と申しましたが、実は自然破壊を最も典型的に行っている場所は都市です。人類はこれまで快適な生活、豊かな生活を求めて活動してきましたが、それが実現されているところは都市です。自然を破壊し尽くした都市、その中にこそ私達はいま、快適で豊かな生活を享受しています。しかし、都市が成立している基盤は、都市への人の集中、富の集中、情報の集中、そして権力の集中によってなされています。特に物事を動かす都市の権力への集中は極めて重要な問題です。都市は周りの田舎を搾取することによって成立している。世界的に見れば、都市的国家が田舎的国家を搾取し、田舎的国家の都市が田舎を更に搾取するという構造になっています。

生態環境に調和した地域像というものは、都会に対する田舎の論理です。生態環境と調和した世界像というものが果たして成立するのかどうか、あるいはいい方を変えれば、田舎の逆襲ということが可能なのであろうかと思うわけです。田舎からそういう事を可能にするような道筋は初めからないでしょう。むしろ都市に権力が集中している。その権力のあり方を変える事が一つではあろうと思います。また、これまでの人類史は人類による破壊の歴史であり、そして、これがいままでの人類史のむしろ正道であらうと申し上げました。未来永劫もそうであるかどうかは別の話です。その道筋を変えるのかどうかということが、いま申しました世界単位論の中の地域の共存というものへ繋がってくるであらうと考えています。

私達はこういう方向に向かおうすれば、私達が住んでいるその都市の奢りというものを考え直さねばなりません。私達は集中された富を基礎として、非常に快適な生活をしているわけですが、そういうものの放棄ということもこの中には含まれてくるでしょう。物をもう作らない

とか、もう車は乗らないとか、電気はほとんど使わないとか、物を捨てないとか、非常に違った形の価値観を持たなければなりません。おそらくその転換する方向は、豊かさとは反対の方向へ向うしかない。それは物質的なものではなく、むしろ知的・精神的な世界の豊かさへとという形に向かうしかないのではないかと思います。私は人類というのは極めて知恵のある賢いものだと思いますが、同時に同じほどに愚かなものだという印象を拭うことができません。おそらく自然破壊をし尽くした上で、初めてこうした人類の新しい道筋が、あるいは新しい方向転換が起こるのではないかと私は考えております。

質疑応答

水島司 山を焼いた後にオイルパームやゴムがマレー半島では随分植えられてきました。最近多種類の木を複層に、それも景観的に良い木を植え、遠くから見れば何となく森のように見えます。けれどもそれがその自然生態の上ではどういった決定的な違いがあるのかということをお聞きしたい。つまり、焼きはらった後にまた、別種類のいまの社会に於いての経済的な価値の大きいものがうえられていくということと、その前後の関係についてご意見をお聞かせいただきたい。

古川 昆虫学者によりますと、例えば木を一本切るだけでも、棲息する昆虫相が変わることです。そこで死ぬ、あるいは消えてゆく、どこか他へ行かなければならないものがどんどん増えてくるようです。人工的複層林の場合、ある種の木とある種の昆虫の対応関係が、その時点で切れる。経済林で変えてゆくのは、森は森だからいいのではないかというご意見だと思うんですが、森の性格が変

わってしまう。昆虫相なり植物相などが変わってしまうという事は、事実としてあると思います。プランテーションというものはあくまでも管理された林であって、コンピュータープログラムみたいにプログラムされたことには答えられるけれども、分からないものは消えてしまうということはあるのではないのでしょうか。

阿部 水嶋さんの質問は単一の樹種、あるいは作物のプランテーションと、いろんな樹種作物を組み合わせた多層林、複層林的なプランテーションを考えた場合にどの程度、生態的な影響が出るか違うかということだと思います。森林生態の方から、荻野さんお願いしたいと思います。

荻野 例えば森の機能としてCO₂、二酸化炭素を吸収するかしらないかというような議論でいうとプランテーションでも他の畑作物もCO₂を固定する機能としては変わりません。それでは森の機能は食糧生産のため、あるい

は工業原材料を作るため、あるいはCO₂だけかとなると、そうではないのです。

最近、生物の多様性、種の多様性という言葉が使われますが、生物の多様性ということの一つには種が多いかどうかということで行われます。しかし、昆虫が何種類、植物種類が何種類、菌類が何種類あるかということ数を数えて、その数で植物が豊かだとか、菌がたくさんいるとか、圧倒的に昆虫が多いとかの議論はナンセンスで、生態系の働きということで種と種がどう結びつきをしているのかという見方が必要になってきます。生態的なあり方、生物の生活のコンプレクシティとか、複雑さがどうなっているのかを見る必要がある。そういう点では単一種によるプランテーションというのが如何に単純な仕組みしか持っていないかが明らかです。更に行うならば生物種というのは過去の生物の生活のあり方が現在の生物を作り出したといいましたが、それが将来の生物の生活像を作るわけですから、そういう意味で、遺伝、進化というレベルで考えていくとすれば、単一プランテーションが如何に貧相なものであるか、ということはほとんど議論する余地はないんじゃないかと思えます。

田中 古川さんが中で「風土的規制力」という言葉が使われていますが、レジュメの方には「風土的規範」という言葉があって、これがどういったものを具体的に指し示しておられるのか、それから生態環境の大きな変貌、

急激な、爆発的な変化というようなことが起こっているということですが、古川さんの考えておられる風土的規制力、風土的規範が今、どんなふうに変化しているのかお伺いしたい。古川 規制力と規範、これはどちらも同じ意味で使っております。規範と思ってもらったら結構です。

風土的規範がどのように変わってきているかは、今後の議論の問題になると思いますが、環境の変化は爆発的でそれを発展と見る見方もあるし、一方で経済原理オンリーでいくと作られてきた風土、生活様式、自然との付き合い方が変わっていくことを恐れる見方も随分あると思えます。

阿部 田中さん自身も地域の規範性、論理ということで2日目に話題提供されますから、大きな問題ですので2日目の総合討論のテーマの一つとしてお渡しすることにします。

友杉 このレジュメの最初のところのパラグラフの「生態環境」以下の所がいま一つははっきりしたイメージを持ちにくいところがあります。「風土的規範」の風土というのは自然環境と置き換えてもいいのか、というのが第一点です。次に「風土的規範はつきつめると万物が作る」ということですが、突き詰める前に、もう少しこれについて説明をいただきたいと思えます。突き詰めてしまうと、受け手として何かイメージを持ちにくいということです。次の「人間中心思想」これは具体的に何を指しているのかということと、「経済

原理」は近代の経済原理を指しているのか、「二重構造を作っている」とは何に対して二重構造を作っているのかと、そのへんのご説明をお願いします。

古川 風土という言葉は日本では和辻哲郎が有名ですが和辻さんの場合には生態環境を扱う面は極めて単純で、雨の降り方、日の照り方、乾き、湿りといったことで、人間学的考察の方に人間の意識のあり方を引きつけて考えておられるわけです。やはりそれはその時代の制約を受けた見方であって、現在の時点で考えると、もう少しそれを人間の意識のあり方だけの問題ではなくて、自然のあり方の方に引き戻したいという気持ちで風土という言葉を使っております。だから和辻さんの意味内容とは少し違います。しかし、現在の自然科学的な用法でいう自然環境でもありません。人事と自然現象が感応し合う場と思っています。人間と自然の感応は自然科学でも考えますが、因果関係というフルイをかけます。突き詰めるというのは、浅はかな人智でフルイをかけるのはヤメタということであります。

「人間中心思想」は私が考えているのは要するにオアシスを中心としてできてくる考え

方で基本的には聖書に書かれているユダヤ教の思想にあります。人間が万物、地に這うすべての獣、実のなる全ての樹木を支配、管理する役目を負わされたものとして人間を作る、そういう形で生まれてきた人間中心主義、それは古代での考え方です。そして近代に入ってその系譜をひいて人間を中心に置いた考え方、自然というのは、生命は、機械の一種であるとみる考え方をさしているつもりです。友杉 東南アジアですからユダヤ、キリスト教の宗教思想が入ってくるのはずっと後になりますね。

古川 古代にも入ります。ヒンドゥ文化、特にウパニシャッドに砂漠の一神教的な考え方が入ってきているというふうに考えています。ウパニシャッド・ヒンドゥの伝統というのは一方では一神教的、アートマン、ブラフマンの考え方、そして他方にはインドの乾いてはいますけれども、乾性林の中にある種々の生命の営みとそこに目を向けたアニミズム、その両者に足を置いていると考えています。こうした形で人間中心思想はボロブドゥール、プランバナン、モンクメール帝国の石像寺院を作る段階で入ってきていると考えています。